



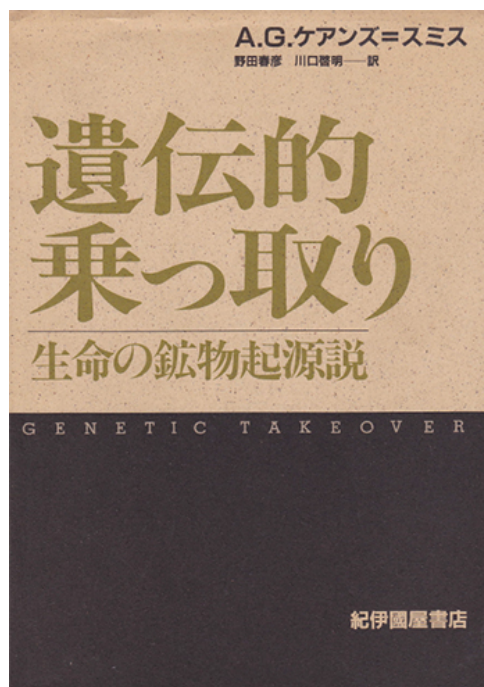
杉山 彰

A・G・ケアンズ・スミスは、かつて我々人類はウィルス生命体の RNA 遺伝子に乗っ取ることにより、DNA 遺伝子からなる DNA ワールドを構築したという。「コンピュータが人類を越える日」を示唆する「2045 年問題(特異点問題)」は、今度は、時と処と位を変えて、珪素(シリコン)化合物生命体であるコンピュータ遺伝子(データ)が、炭素(カーボン)化合物生命体である、我々人類の DNA 遺伝子に乗っ取ろうとする争いでもあるのです。果たして、我々人類は、コンピュータ遺伝子に乗っ取られてしまうのだろうか。仮に乗っ取られたとしたら、我々の人類は、いったいどこに行ってしまうのだろうか……。Web 版「言霊量子論」の第 1 回目は、「遺伝的乗っ取り」論という、ちょっと挑戦的なテーマに取り組んでみました。お楽しみください。

火之迦具土神(ほのかぐつちのかみ)。今月号の白川通信の言霊量子論は、この火之迦具土神のことからお話ししてみたいと思います。火之迦具土神といえば「言霊百神」に「先天父母音の十七音と後天子音の三十二音の合計四十九音に火之迦具土神・言霊<ン>を加えて五十音となり、音のすべてが出そろったとき、これを神代表音文字にあらわして、太古はそれを粘土盤の上に記した」と記述されています。

さらに「迦具土は書く土の隠語で、天の香具山、常世の国の香久の果等すべて香具、香久、隠は書くことで、文字のことである。粘土盤は初めは乾いた土のままだったが、後にはこれを窯いで素焼にした。この素焼の文字盤を甕(みか)と云う。武甕槌(たけみかつち)である。甕に書き現わして神の原理を示した文字を甕神(御鏡くみかがみ)と云う」と記述されています。

先日、私は、祝殿講習の「土のご修行」に参加させていただきました。そのとき七沢先生より「生命の起源は、有機質の炭素を含んだ粘土だよ」というお話をお聞きました。このとき私の脳裏に瞬間的に浮かんだのが A・G・ケアンズ・スミスの「遺伝的乗っ取り」論でした。



突然“遺伝的乗っ取り”と言われても、白川通信の読者の皆様は困惑されるとは思いますが、この「遺伝的乗っ取り」論は、我々人類にとっては驚愕すべき内容だったのでした。何が驚愕すべき内容だったのか。「炭素分子を含んだ粘土生物の結晶体こそが地球に登場した最初の生命である※1」という内容でした。文字の起源説と生命の起源説に類似性があるという事実でした。

そして、この驚愕には続きがあります。炭素分子を含んだ粘土生物の結晶体が、自らの生命情報、つまり遺伝子を複製する機能を有していたというのです。生物が生物であるための要件は、「多様化世界」を著したフリーマン・ダイソンによれば「生物には二つの基本的な機能がある。それは代謝と複製である」と。そして続けて「生命を持つということと複製するということは事実上同じ意味である」と述べています。

ここで読者の皆様から「粘土生物に代謝現象はあるのか」という疑念の声が飛んできそうですが、じつは粘土生物にも代謝現象があるということが確認されたのです。この代謝現象を発見したのは日本人で「ハイドロタルサイト」と呼ばれる粘土鉱物が空気中の二酸化炭素を吸ったり、吐いたりしている“呼吸”現象を発見したと発表し、2013年に米国化学会誌に「呼吸する粘土鉱物」というタイトルで掲載されました。

複製は言うまでもありません。結晶体の最も得意とする機能で、たとえばミョウバンや硫酸銅はタネ結晶を溶液に浸けて放置すると結晶体は増殖を続けて生き物のように成長していきます。ここで注意したいのは、結晶体の複製は複製ではなく増殖機能なのです。ここの違いが、このあとに大きな問題に発展します。

ちょっと話が横道にそれたようですが、ここからが「遺伝的乗っ取り」の驚愕すべき内容なのです。「炭素分子を含む粘土生物の結晶体」には致命的な欠陥があったのです。それは、結晶体は自らを複製する機能を有していなかったのです。複製ではなく、自らを増殖する機能しか有していなかったのです。複製と増殖とはどう違うんだ。これが大違いなのです。増殖はいわばコピー機みたいなもので、原本である、つまり自らを複写します。コピー機はご存じのように原本をコピーし続けると、コピー精度が劣化し、最終的には輪郭などがぼやけ、自らと同じものがコピーできなくなります。生物学的に言うと奇形種が発生してしまうのです。突然変異が多発す

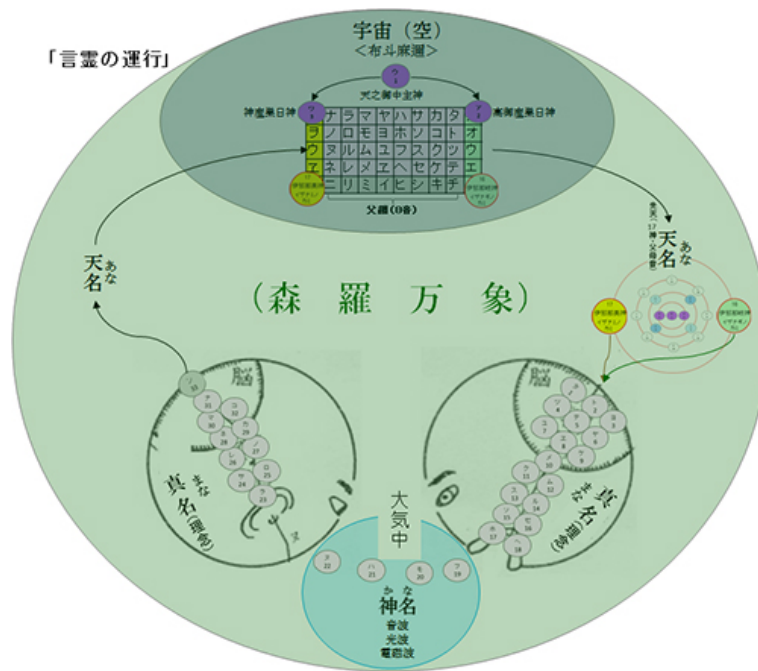
るともいえます。生物にとって、この現象は致命的で、早晩、種としての継続をまっとうできなくなる原因になります。

では、複製する機能を有していたらどうだったのでしょうか。複製は、いわば設計図を起こして設計図通りに自らを生産するようなものです。工業生産システムを見るまでもなく、この方式で奇形種、つまり不良品が発生する確率は圧倒的に少ないのです。生物にとって「種の存続」の絶対条件は血統的に純粋で優れた子孫を多く残すことです。

「炭素分子を含む粘土生物の結晶体」は地球に登場した最初の生命体である役割を、まさに終えようとしていたのですが、この生命体を乗っ取った生命体があったのです。RNA 生命体です。RNA 生命体は、進化のなんらかの過程で自らを複製する触媒として酵素活性機能を組み込むことに成功して複製機能を手にしたのでした。RNA 生命体は「炭素分子を含む粘土生物の結晶体」が蓄積していた増殖情報、つまり遺伝子情報をすべて乗っ取り、連鎖結晶体として統合化し、この地球の生命体の新しい覇者として君臨したのでした。

フリーマン・ダイソンは生命体の知識(知能)レベルの高さは、自らが創造し蓄積した情報をより正確に高速に大量に複製できる能力に比例すると定義しています。情報を正確に高速に大量に複製できない生命体は、情報を正確に高速に大量に複製した生命体に凌駕され、覇権交代への運命を歩むことになる」と述べています。A・G・ケアンズ・スミスの「遺伝的乗っ取り」論とは、まさにこのことを意味していたのです。

ここで話が変わりますが、火之迦具土神・言霊<ン>を加えて五十音となり粘土盤の上に記した甕神(御鏡<みかがみ>)は、神代表音文字を伝える「情報」としては、あたりまえのこととして布斗麻邇音図という設計図を有する複製システムです。



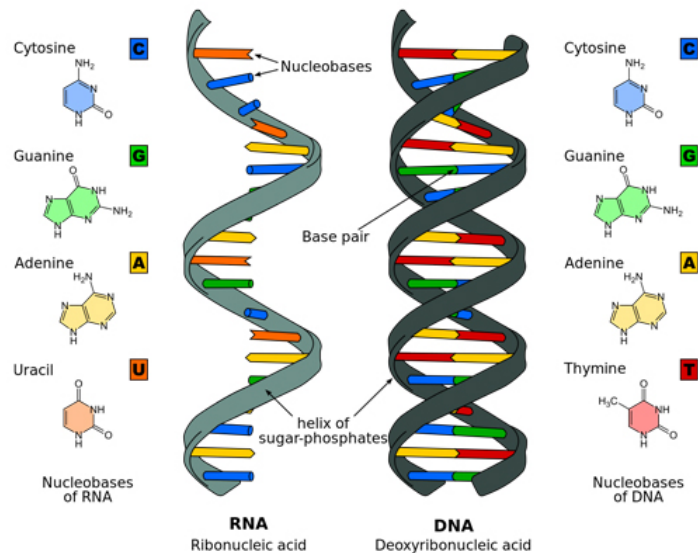
「言霊百神」においても「五十音図」は言葉の全体的集積であり、同時にその文字の堆積である事が理解される。然も人間が操作する言葉(智慧)の内容は此の五十個以下でも以上でもなく、これが完成数であって、然も欠くる所はない。人間はこの五十個の要素の上に全精神を委ね、同時にその知情意の活動を自覚する。人間の精神活動が無限に複雑なものであるように見える事は、この一定数に限定されて居る種智が無限に複雑なコンビネーションで集散離合する・・・」と記述されている。

さて、本題に戻ります。遺伝的乗っ取りにより、地球上の生命体としての新たな覇者となった RNA 生命体は複製の歴史を重ねていくことにより、炭素系化合物の生命体である我々人類の誕生に欠かせない核酸、アミノ酸、そしてタンパク質からなる生命遺伝子を大量に生産する自己複製能力と情報伝達能力を獲得し、RNA ワールドを構築することに成功したのです。RNA ワールドの覇者である生命体は RNA ウィルスと呼ばれ、なかでもレトロ・ウィルス(エイズウィルス

や腫瘍ウイルス等)は逆転写酵素を創り出し、後に誕生する DNA 生命体の出現に不可欠な役割を担うことになるのです。

このようにして生命体の覇者として地球上に数億年以上も君臨した RNA ワールドにも、やがて終焉のときが訪れます。RNA 生命体の複製機能によって生成される遺伝子構造は紫外線や高温環境に対する耐性が弱く複製ミスが多発するようになり、かつて地球上に君臨していた「炭素分子を含む粘土生物の結晶体」と同じように、寄生種や突然変異を誘発し血統的に純粋で優れた子孫を多く残すことができなくなったのでした。

代わって登場したのが DNA 生命体でした。DNA 生命体は、RNA 生命体の逆転写酵素を効率よく運用することにより、RNA 生命体の遺伝子を着々と取り込んでいったのでした。DNA 生命体の遺伝的乗っ取りの勃発です。RNA 生命体の遺伝子を逆転写酵素によって取り込んだ DNA 生命体は、RNA 生命体の遺伝子鎖より長く、しかも、その遺伝子鎖を二重螺旋系に進化させることにより、一方の遺伝子が紫外線や高温環境によって破損しても、片方の遺伝子が瞬時に代替する修復能力を獲得したのでした。遺伝子の複製能力がさらに正確に高速になったことは言うまでもありません。



出典: WIKIBOOKS

こうして RNA 生命体の遺伝子情報はすべて、DNA 生命体に乗っ取られ、RNA ワールドから DNA ワールドへ覇権交代が起きたのでした。DNA ワールドの生命体は、もちろん我々人類種です。我々人類は、DNA 遺伝子情報に書き込まれたアミノ酸、そしてそのアミノ酸からタンパク質がつくれ、そしてそのタンパク質からつくられる 60 兆個の細胞からなる集合体と言えます。言葉を替えれば、我々人類は「炭素系化合物生命体」とも言えます。「炭素系化合物生命体」である我々人類は、この地球上の覇者として数 10 億年を支配し続け生命連鎖の頂点に君臨しています。そして今、我々人類の遺伝子を蓄積・複製している DNA ワールドに危機が訪れようとしているのです…。(続く)

この続きは、次回の白川通信 Web にまわさせていただきたいと思います。今回の言霊量子論は、量子論とは関係のないお話のようでしたが、じつは遺伝子生物学の分野は、その研究対象の粒度が分子生物レベルから量子生物レベルに相転移しつつあるのです。小笠原先生は、「23 対の染色体(遺伝子)の振動を増幅したら、きっと五十音になる」とおっしゃっていました。量

子生物レベルの内容に言及しておられたのです。DNA ワールド論は言霊量子論の最先端ともなるべきテーマでもあるのです。

さて、今回は、七沢先生の「生命の起源は、有機質の炭素を含んだ粘土だよ」の一言に触発されて「遺伝的乗っ取り」論、その①>を記述してみました。

次回の「遺伝的乗っ取り」論、その②>では、DNA ワールドを乗っ取ろうとしている生命体は何なのか、そして、その生命体が私たち人類の未来をどのように変えていこうとしているのか、また我々人類のDNA が乗っ取ったRNA ワールドは一体どこにいつってしまったのか、そして、そのRNA ワールドが、我々人類に報復しようとしているらしいのです・・・、というテーマで展開してみたいと思っています。お楽しみにしていただければと願っています。

※1. A・G・アンズ・スミスの「遺伝的乗っ取り」論においては、粘土生物の結晶体を「炭素物質を含む粘土生物の結晶体」と「炭素分子を含まない粘土生物の結晶体」の2種類を定義しています。発生タイミングの前後の問題なのですが、本文では「粘土生物の結晶体」というくり方で統一して記述。両者の差異については言及していないことをご了承ください。

[/wpex]